

Ⅱ. 特集 立教サービスラーニング (RSL) とその先にある学び —RSL 実践系科目を履修した学生の学びの記録—

「立教サービスラーニング (RSL) とその先にある学び」の趣旨について

RSL センター教育研究コーディネーター
福原 充

大学での学びは、正課教育の科目を一つ履修し終えただけで完結するものでは当然ない。また、大学は4年間のカリキュラムデザインを提示してはいるが、学生は必ずしもこちらが意図した通りの形で学びを進めるわけでも、大学が定めた枠のなかだけでの学びで留まる存在でもない。

「自由の学府」を掲げている本学において、RSL 科目は正課教育として講義系・実践系の両科目を全学共通科目の中で展開している。学部の専門性や学年の枠を越え、多様な背景や関心を持つ学生がそれぞれの専門性や背景に立って学び合えることがひとつの特徴である。また、「RIKKYO Learning Style」に代表されるように、正課外教育を含め、学生生活そのものを「学びの場」として捉えており、RSL 科目もボランティアセンター等と協力・連携しながら、科目履修後も含めた学生の学びに寄り添い、支援することを重視して事業を展開している。

つまり、学びには連続性があり、その連続性のなかで「個」の存在である学生は「他者」や多様な「現場」(現実)と関係を築き、専門性を究め、自己を形成させ、新たな社会を創造する存在として更なる歩みを進めていくのである。

この特集では上記の点を意識しつつ、RSL 科目を履修した学生に対し、RSL を履修した動機やRSLでの学びを通して変化した社会への視点、他者との関わり方等を中心としながら、履修後も含めた自身の学生生活について執筆を依頼している(本特集と併せて「Ⅲ. 論考・投稿欄」にも、正課・正課外教育を往還した4年間の学びとして学生に執筆を依頼し、掲載している。是非読んでいただきたい)。

特に、2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大の影響もあり、実践系6科目中の3科目は休講となった。残りの3科目も授業内容を一部変更するなど調整しながら、1科目を除き、対面での学外活動が実施できないといった厳しい状況での開講となった。この特殊な状況も考慮して、今年度は例年とは異なり、コロナ下での学生の学びを記録として残すことも意識して2020年度の実践系科目を履修した(科目を履修してから時間があまり経過していない)学生を中心に執筆を依頼している。今年度の執筆者の履修年度は次の通りである。

- ・「RSL-コミュニティ(池袋)」(2020年度)
- ・「RSL-コミュニティ(埼玉)」(2020年度)
- ・「RSL-ローカル(南魚沼)」(2020年度)
- ・「RSL-プロジェクト・プランニング」(2019年度)

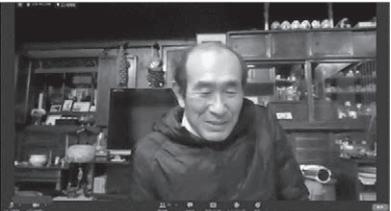
この特集は3回目の試みとなるが、コロナ下という特殊な状況は、日常生活はもちろんのこと、「大学生」としての学び方にも変化をもたらし、様々な苦労や戸惑いがあったことが本文より読み取ることができる。しかし、その一方で、学生が冷静に現実を見つめ、これまでの自分の「当たり前」と向き合いながら、活動に取り組み、また、履修後もそれぞれの関心に基づきながら前向きに学び続けようとする姿勢もみることができる。学生達の語りから、私たちもあらためて「シティズンシップ」とは何か、「共に創る」ということはどういうことかを学ばせてもらっているように感じる。

この財産を真摯に受けとめ、育み、積み重ねることで、今後の更なる展開に活かしていきたいと考えている。関係者の皆さまにおかれましては、改めて心より感謝を申し上げます。

□立教サービスラーニング (RSL) 実践系科目概要 (全6科目)

<p>科目名 (2単位)</p>	<p>全学共通科目 「多彩な学び(知識の現場)」科目群 「RSL-コミュニティ(池袋)」 多文化共生と相互連帯</p>
<p>日程 フィールド (2020年度)</p>	<p>秋学期 : 集中(金曜日3限:13:25~15:05) 事前学習:9/25、10/2、10/9、10/16(全4回) 現地活動:10月下旬~12月中旬の期間内(原則)インタビュー調査 事後学習:2021/1/8、1/15、1/22(全3回) フィールド:豊島区(池袋地域) 協 力:NPO法人ゼファー池袋まちづくり 理事長 小林俊史 NPO法人「としまの記憶」をつなぐ会 副代表理事 吉田いち子</p>
<p>担当者</p>	<p>後藤 隆基(本学兼任講師)</p>
<p>履修者定員</p>	<p>20名</p>
<p>内 容</p>	<p>豊島区は、「東アジア文化都市構想2019」の国内都市に選ばれ、池袋を中心にまちづくりも大きな国際化の流れの中にある。また、2018年度に池袋キャンパスは開学100周年という節目を迎え、新たな地元との関係づくりに内外から期待が寄せられている。</p> <p>この授業では、外国籍住民も増え続けているなど急速にグローバル化を伴う変貌をとげている池袋をフィールドとして、「多文化共生と相互連帯」というテーマに取り組む。池袋を主なフィールドに、多様な文化的背景を持つ住民の生活の中にある諸問題を「歴史・記憶」「次世代・子育て」「芸術・文化」の3領域から「見える化」し、住民との協同を通じて改善を図るための方法論を主体的かつ具体的に計画しながら、相互連帯の仕組みにつながるアプローチを考えていく。活動中は、豊島区(池袋地域)で活動する方々との対話(インタビュー等)を通じて、「池袋キャンパス」という存在が、地域社会の中で果たしうる役割についても考える。</p> <p>※本科目で実施したインタビューの記録は、 『2020年度 立教サービスラーニング(RSL)センター「RSL-コミュニティ(池袋)」学生インタビュー記録集』(2021年3月31日発行)としてまとめている。</p> <p>※新型コロナウイルス感染拡大の影響により、学外活動(インタビュー)はオンラインで実施した(事前・事後学習は社会状況もみながらオンラインと対面を併用しながら実施)。</p> <p>※インタビューの一人である、三遊亭圓窓師匠のご厚意と本学チャプレン室事務課の協力を得て、12/18(金)13:25~15:05に池袋地域の歴史や文化を「落語」を通して学び、知ることを目的とした、「落語の授業」を実施した(学生任意参加)。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>

<p>科目名 (2単位)</p>	<p>全学共通科目 多彩な学び(知識の現場) 科目群 「RSL-コミュニティ(埼玉)」 自立と社会福祉：生活困窮者への埼玉県アスポート学習支援</p>
<p>日程 フィールド (2020年度)</p>	<p>秋学期：金曜日・5限(17:10~18:50) 事前学習：9/25、10/2、10/9、10/16(全4回) 現地活動：10月中旬~12月中旬の期間内(原則)で計4回(1回2時間)の活動 事後学習：11/27、12/4、12/18、2021/1/8、1/15、1/22(全6回) 〈フィールド：受け入れ先〉 埼玉県内におけるアスポート学習支援事業(教室)に参加 ：一般社団法人 彩の国子ども・若者支援ネットワーク</p>
<p>担当者</p>	<p>田中 聡一郎(本学兼任講師)</p>
<p>履修者定員</p>	<p>15名</p>
<p>内 容</p>	<p>厚生労働省によると、日本で貧困状態にある子どもの割合は、現在7人に1人といわれている。特に相対的貧困として語られる日本の社会状況では、子どもの貧困は可視化することが難しく、様々な事情から学びたいのに学べない、学ぶ意欲が持てない子どもたちが社会から置き去りにされている現実がある。</p> <p>この授業では、サービスマーケティングの手法に基づきながら埼玉県内の生活困窮世帯に暮らす、主に中学生の学習支援事業への参加を通じて日本の社会保障制度の中心的政策のひとつである生活保護制度の運用実態に触れるとともに、貧困と格差、社会的包摂等を巡る諸問題についての理解を深めることを目標としている。</p> <p>校内での事前学習では、生活保護制度や子どもの貧困について学習し、学外での活動として、一般社団法人彩の国子ども・若者支援ネットワークが主催する「アスポート学習支援」に、学習指導員として履修者が参加する。また、事後学習として、「アスポート学習支援」のスタッフの方を交えた学びの報告会を実施し、学生と活動先、それぞれの立場からみえたことを言語化し共有する。</p> <p>※新型コロナウイルス感染拡大の影響により、学外活動としての「アスポート学習支援」への参加を従来の8回から4回に変更して実施(対面)。また、事後学習の回数を4回から6回に増やし、実施した(事前・事後学習は社会状況もみながらオンラインと対面を併用しながら実施)。</p> <div data-bbox="395 1646 805 1966" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="817 1646 1369 1966" data-label="Image"> </div>

<p>科目名 (2単位)</p>	<p>全学共通科目 多彩な学び(知識の現場)科目群 「RSL-ローカル(南魚沼)」 雪掘りと農村交流を通して持続可能な社会を考える</p>
<p>日程 フィールド (2020年度)</p>	<p>秋学期 : 集中 事前学習: 12/12(土) 13:30~17:30(全1回) 現地活動: 2021/2/7(日)~2/10(水): 4日間 事後学習: 2021/2/24(水) 13:00~16:00(全1回) 〈フィールド: 受入れ先〉 新潟県南魚沼市栃窪集落: NPO法人 ECOPLUS</p>
<p>担当者</p>	<p>高野 孝子(本学客員教授)</p>
<p>履修者定員</p>	<p>15名</p>
<p>内 容</p>	<p>この授業では過疎高齢化の進む農村での体験的な学習を通して、現代社会の構造を知り、自然と人間の関係や本質的な豊かさについて問い直し、持続可能な社会の実現について考えることを目標としている。現地活動は豪雪地帯(新潟県南魚沼市栃窪集落)でのフィールドワークとなる。</p> <p>一般的に、除雪する作業は「雪かき」と呼称されているが、世界のなかでも最豪雪地帯である南魚沼地域では「雪かき」のことを「雪掘り」と呼ぶ。同地域の真冬の生活は厳しい自然との共存が求められ、それゆえに独特の文化が営まれている。また、厳しさがある冬の生活の一方で、今なお自然豊かな南魚沼地域には四季折々に移り変わる美しい景色と「食」の恵みがある。</p> <p>雪国で暮らすとはどういうことなのか、自然と共存した生活とは何か、コミュニティの意味とは何か、伝統知や地域文化とは何か等について、雪掘り活動の他、地元の小規模小学校(複式学級編成)訪問、栃窪集落到に住む人々との交流等の生活体験を通して社会における市民としての役割を考える。</p> <p>※新型コロナウイルス感染拡大の影響により、南魚沼市栃窪集落での宿泊を伴う学外活動は中止。授業の構成を変更し、事前学習・学外活動・事後学習を全てオンライン(オンデマンドを含む)で実施した。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: flex-end;">    </div>

科目名 (4単位)	全学共通科目 多彩な学び(知識の現場)科目群 「RSL-グローバル(SDGs)」 ローカル問題はグローバル課題:SDGs 未来都市の陸前高田市と国連機関
日程 フィールド (2020年度)	秋学期 :集中 事前学習 :5/16(土)、5/23(土)、6/20(土):全3回 現地活動①:[岩手県陸前高田市]7/25(土)~7/28(火) 現地活動②:[アメリカ・ニューヨーク(NY国連本部)]8/23(日)~8/29(土) 事後学習 :9/26(土) 〈フィールド:受入れ先〉 岩手県陸前高田市/アメリカ・ニューヨーク(NY国連本部)
担当者	村上 清(本学客員教授)
履修者定員	10名
内容	この授業では「持続可能な開発目標(SDGs)」に代表されるように、私たちの身の周りの問題が、世界各地に共通する課題でもあることを理解し、ローカルとグローバル双方の視点を持った思考を養うことを目指している。あわせて将来のキャリアとして、国際機関で働くことを考える機会とする。 フィールドはローカルを「岩手県陸前高田市」、グローバルを「ニューヨーク国連本部」とし、この2か所で活動する。陸前高田市では市が取り組んでいる「震災復興」と「SDGs 未来都市」事業を現地調査や第一次産業の体験活動を通じて学ぶ。 ニューヨークの国連本部では、国連機関に勤務する国際公務員や外交官からの講義、意見交換等を通じて、21世紀の世界が抱える諸問題を理解し、その解決方法を検証する。 ※新型コロナウイルス感染拡大の影響により、岩手県陸前高田市及びアメリカ・ニューヨークでの学外活動が困難となり、2020年度は休講となった。

科目名 (2単位)	全学共通科目 多彩な学び(知識の現場) 科目群 「RSL-グローバル(フィリピン)」 Rikkyo Service Learning Program in the Philippines
日程 フィールド (2020年度)	〈フィールド:受入れ先〉 フィリピン マニラ ケソン市:Trinity University of Asia
担当者	藤井 満里子(RSLセンター助教)
履修者定員	15名
内容	<p>この授業では、立教大学がもつ独自のグローバルネットワークであるCUAC(世界聖公会大学連合会)を活用し、フィリピンのケソン市にあるトリニティ大学(TUA)が主催するサービスラーニングプログラムに参加する(現地での活動の中には、同プログラムがアジア地域の大学生が参加するプログラムであるということもあり、各国の大学生同士の交流を目的としたセレモニー等も実施される)。</p> <p>活動するマニラ近郊のコミュニティでは、社会格差が深刻化しており、目に見える貧困(絶対的貧困)とどのように向き合うかが社会的な課題となっている。TUAでは、地域の人に「寄り添う」ことを中心に「教育」や「医療」などにおける支援活動を展開しており、この活動に日本国内の聖公会関係大学や韓国、フィリピン等の大学生がチームとなって一緒に向き合う。その中で地域に寄り添う手法と国際的な視点を養うことを目標にしている。</p> <p>※新型コロナウイルス感染拡大に伴い、2019年度に引き続いて2020年度も休講となった。2年連続での休講となったが、CUACおよびTUAより“CUAC Service-Learning Online Meet-Up/Fellowship”が企画され、2021年1月30日にオンライン(Zoom)にて実施された。本科目を過去に履修した学生(卒業生含む)も参加し、フィリピン・韓国・日本の学生たちが交流した。</p>

<p>科目名 (2単位)</p>	<p>全学共通科目 多彩な学び(知識の現場) 科目群 「RSL-プロジェクト・プランニング」 フィールドに出て、自ら社会の課題を考える</p>
<p>日 程 フィールド</p>	<p>春学期 : 水曜 5 時限 (17:10~18:50) 事前学習:(全6回) 現地活動:夏季休業期間内で実施(国内5日間、海外15日間) 事後学習:9/2(水)全1回 〈フィールド:受け入れ先〉 ①東京ボランティア・市民活動センター/東京エリアの団体・機関とのネットワーク作り、ボランティア・市民活動の推進、支援 ②一般社団法人くらしサポート・ウィズ/生活協同組合系事業、社会的課題の相談業務他/受入団体の活動および、そこから紹介される生活協同組合での活動 ③NPO 法人キッズドア/子どもの学習支援、各種プログラムの企画・運営 ④認定 NPO 法人多文化共生センター東京/外国にルーツを持つ子どもたちの教育支援、多文化理解 ⑤NPO 法人 NPO birth/環境保護、環境教育 ⑥NPO 法人 サポートハウス年輪/高齢者支援、介護・地域支援 ⑦一般社団法人 まるオフィス/まちづくり事業、地域協育、移住推進、若者支援 ⑧学校法人アジア学院/有機農業、異文化コミュニケーション、リーダーシップ ⑨NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター/キャンプ活動を通じた青少年教育、山村地域における地域創生 ⑩日本財団学生ボランティアセンター/インドネシアで低所得者層の子どもたちに向けた教育ワークショップ(13日間)</p>
<p>担当者</p>	<p>藤井 満里子 (RSL センター助教)</p>
<p>履修者定員</p>	<p>50名</p>
<p>内 容</p>	<p>この授業では、受講生自身が社会の一員であることを改めて自覚し、大学生としてすべきこと、これから先の人生の中でできることを深く考えることを目的としている。そこで、現代の多様な社会的課題に対し、活動を展開している国内外の10の活動先から一つを学生が選び、それぞれが展開している事業に参加する。</p> <p>各活動先の方々と共に社会に内在している様々な課題に取り組み、諸問題に対し参加者の一人として考え、行動することを通して市民性を養うことを目指す。また、将来のキャリア形成を考えるきっかけとなることも期待している。</p> <p>※新型コロナウイルス感染拡大に伴い、2020年度は休講となった。</p>

「RSL-コミュニティ（池袋）」を通して学んだこと

文学部文学科日本文学専修3年

佐藤 由依子

(2020年度履修)

1. RSL科目を履修するきっかけ

大学2年生の春、新型コロナウイルスの影響で文学部はすべての授業がオンラインになった。2年の夏休みに予定していた海外留学プログラムは中止。高校2年生のころから面接や説明会に参加して準備を進めてきた東京オリンピックでのボランティアもオリンピックの延期に伴い延期。所属しているダンスサークルの定期公演は本番を直前にして中止となり、活動停止に。大学1年生の時にはじめたサンドイッチ屋でのバイトも新型コロナウイルスの影響によりお客さんが激減し、6月にお店は閉店、アルバイト先もなくなった。大学生活を一番謳歌できると思っていた大学2年生。予定していたもの、ずっと楽しみに準備を進めてきていたイベントが軒並み中止になってしまい、ステイホームの生活が始まった。大学1年でせっかくできた友達も、疎遠になってしまい、横のつながりが少なくなってしまったことがとても残念だった。私にとってこの1年は忘れられない苦勞の年になったと思う。そんな中で私はRSLの授業を2年の秋学期に履修することを決めた。理由は3つある。

1つはもともと1年生のころからRSLの実践系科目に興味があったからだ。2年春学期には「RSL-プロジェクト・プランニング」の授業の履修を考えていた（この科目は2020年度はコロナ禍の影響で休講になってしまったが）。講義系科目ではなく、自分たちで動いて授業を作っていく実践系科目で学んでみたいという思いからこの授業を履修した。もう1つの理由としては、単純に大学に行きたかった。春学期は一度も大学に行かれなかったのも、友達に会うこともできず、アルバイトもサークルもなく、1日中パソコンの前に座ってただ授業を聞いて、大量の課題をこなすだけの生活が本当に苦しく、大学に行きたいという思いが強かった（皮肉にも、タイピングのスピードが格段に上がったのはオンライン授業の山のような地獄の課題のおかげかもしれないが）。秋学期、「RSL-コミュニティ（池袋）」（以下、「RSL 池袋」）が一部対面で授業を行うということを知り、大学に行って少しでも周りとの交流をしたいという思いから履修を決めた。3つ目にインタビューを行うという点に魅力を感じた。地域の方々に直接インタビューをするという機会はなかなかないだろうと思い、参加してみたいという思いから履修を決めた。

2. 履修中に考えたこと・経験したこと



【写真1】

久しぶりの対面での授業。コロナ下であるため、グループワークも窓を開けたり、消毒したりするといった、感染対策をとり、マスクをしながら行った。

「RSL 池袋」では、豊島区池袋における多文化共生の地域づくりについて、「歴史・記憶」、「次世代・子育て」、「芸術・文化」の3つのチームに分かれて、それぞれのテーマにあったインタビュー3人にインタビューし、インタビュー原稿としてまとめ、最終的に一つの対談記事を作って発表するというのが目標だった。実際に授業が始まってみると、1年生の履修者の多さに驚いた。1年生に話を聞くと、入学してから「RSL 池袋」の授業で登校してくるまでいままで一度も大学に来たことがなか

ったという。コロナ禍ならではの事象である。実際、第1回の事前学習で大学に登校した時は、私自身も半年以上ぶりの登校だった。久しぶりの対面授業で、先生や他の履修生との近い距離感や熱量を感じられるといった対面ならではの雰囲気と空気感、そして楽しさがあった。

授業のはじめに行われたチーム分けで、私は「歴史・記憶」チームに入った。私は小・中学生時代を大阪で過ごしており、何度か劇場に落語を見に行った経験があって落語が好きだったので、落語家さんへのインタビューをしてみたいと思ったからである。「歴史・記憶」チームでは主に池袋の町の歴史や昔の記憶に関することをインタビューのテーマに取り上げた。ご住職、町会長さん、落語家さんといった、池袋の町の歴史や古い記憶をもつ方々にインタビューを行うことになった。ただ、今年は例年とは異なり、対面ではなく Zoom でのオンラインインタビューになったので、難しい面も多くあった。

インタビュー期間の授業はオンラインで行われたので、私たち自身、チームメイトとのコミュニケーションを直接とることができず、インタビューの準備は LINE やテレビ電話などのネットを介して行われた。また2~4年生といった、学年もばらばらの7人チームだったので、インターンの予定が入ってしまうチームメイトがいたりとそれぞれ忙しく、インタビュー日が迫る中、なかなかコンタクトがとれなかったりと、意思疎通を図ることがとても難しかった。仕事量の偏りやチーム内での温度差をどうなくしていくか、という点もオンライン授業ならではの課題だった。また、実際のインタビュー中にもインタビュアーである私たち自身が互いに Zoom 越しなので、アイコンタクトをとることが難しく、物理的な距離がある中でのインタビューの難しさがあった。対面で行われるインタビューよりも、より入念な打ち合わせと、互いに空気を読み合う力、タイミングや時間をうまく使う力が必要であったと感じる。そのような例年とは違った大変さがある中ではあったが、インタビューの前には毎回チーム皆でミーティングの時間をとるようにしたり、各自準備をしてそれを持ち寄るなど、有意義なインタビューを行うことができるようにチーム皆で工夫をして取り組んだ。この成果もあって、忙しい中でもそれぞれが時間を作って授業に取り組むことができたのではないかと感じる。

インタビューを通して学んだことは、インタビューとは「対話」であるということである。私たちのチームでは事前に具体的な質問事項や話の流れなどを準備してから臨んだ。私はインタビューとは準備した質問をして、答えてもらう、このようなほぼ一方通行のコミュニケーションを想像していた。しかし、実際のインタビューでは、インタビュイーの発言に対して新たな疑問が生まれたり、もっと深掘りして聞いたり、逆にインタビュアーの私たちが質問をされて答えたりと、良い意味で全くと言ってよいほど予定通りには進まなかった。予定通りに進まなかったからこそ、面白い雑談やオフレコ話を聞くことができたり、池袋の町の歴史はもちろんのこと、インタビュイーの方の生き方や考え方など、「人」を知ることができたと感じる。3回のインタビューを通して、インタビュアーとインタビュイーの間で、信頼関係のようなものを築くことができたのではないと思う。インタビューとは決して一方通行のものではなく双方の「対話」であると



【写真2】

インタビューは Zoom を用いてオンラインで実施した。インタビューの回数を重ねるうちに圓窓師匠も次第に熱が入り、身振り手振りを交えてお話して下さるようになった。

いうことを学んだ。「対話」であったからこそ、インタビュアーの私たち自身、インタビューを楽しむことができたのだと感じる。

私が主担当をした三遊亭圓窓師匠は落語家さんで、落語家としての地域とのかかわりと、その一方で池袋の町の一市民としての両方の側面からお話を聞くことができた。また、池袋地域の歴史を豊島区民として肌で体感・経験してきた当事者として、池袋の戦争の歴史や当時の町の様子、生活の様子などのお話はとても貴重であったと感じる。



【写真3】

当日の「落語の授業」の様子。2020年12月18日、池袋キャンパスチャペル会館2F（マグノリア・ルーム）で行われた。

また、圓窓師匠は今回特別に「落語の授業」を開いてくださり、池袋にまつわる創作落語を披露してくださった。なかなか日本の伝統に触れる機会がない私たちにとって、落語という日本の伝統芸能に直接触れるという非常に貴重な体験となった。師匠によれば新型コロナウイルスの影響で、多くの劇場で寄席が中止となる中、落語においてもオンライン化が進んでいるという。オンラインだからこそ、外国とつないで落語の稽古をすることができたり、離れている人同士をつなぐことができるという点を師匠はプラスに捉えておられた。とはいえ、インタビューではいつも「それでもやっぱり生の落語が最高なんだよ」とお話をされていた。その意味を、私は「落語の授業」で実感することとなった。話の内容だけでなく、しぐさや声の抑揚、ボリューム、目線。これらすべての要素が合わさって落語が作り上げられていた。その場にいるからこそ感じられる落語家さんの息遣いや熱量は、オンラインでは感じることはできない生の落語の醍醐味であり、これこそが落語の魅力であるということをもっと体感することができた。私は今までにも、何度か生の落語を聞いたことがあったが、当時は「対面」で落語を聞けることが当たり前前の時代だった。しかし今回、コロナ禍という対面から非対面コミュニケーションへの移り変わりが求められ、その新しいコミュニケーションの在り方に少しずつ慣れてきつつある状況で行われた「対面」の落語の授業は、これまでには感じることはなかった「対面」のありがたみと、熱量がダイレクトに届く生身の人間による文化継承の重要性、生のエンターテインメントのすごさを実感する機会となった。対面での活動が制限される今だからこそ、そのありがたみに気が付くことができ、より感動が大きかったと思う。またインタビューを通して、圓窓師匠の考え方や生き方、コロナ禍での苦労などを聞いていたからこそ、より感じるものが多かった。これからどんなに世の中が便利になっても、生身の人間同士の「対面」の重要性は変わらないのだろうと思う。

私はこれまで、池袋に対して「若者の町」「繁華街」というようなイメージを持っていた。しかし、実際にインタビューをしてお話を伺うと、かつての池袋には何もなくて、大塚の方がずっと栄えていたというようなお話や、戦争のお話、闇市のお話、立教ももとは何もない広場だったというようなお話があり、それらは私たちにとってとても意外な事実だった。私が普段見ている池袋の町の形になったのはつい最近であり、「繁華街池袋」というこれまでの私のイメージがインタビューを通して覆された。戦争の頃の記憶をたどるお話を聞き、にぎやかな池袋の町の背後には常に戦争の記憶があり、私たちはそれを忘れてはいけないと感じた。3人のインタビュアーは異なる職業につかわれている方々だ

が、「歴史・記憶」という観点では戦争という共通の記憶を持ち、過去と今をつなぐお話を伺うことができたことは、世代という共通の記憶の存在を感じる機会となった。その一方で、各個人がそれぞれ違った形でまちづくりに関わっているということを学んだ。町会長さんは具体的なまちづくり、ご住職は仏教やお寺と町とのかかわり、圓窓師匠は池袋にまつわる創作落語、そしてレッスンのプロだからこそできる出前授業による町とのかかわり。このような個人による多種多様な池袋の町へのかかわりや、働きかけが、池袋という町の文化や歴史を作ってきたのだと考える。これは今後の池袋の発展の上でも重要なキーワードとなるだろう。

授業最終日、チームごとの発表があった。私の所属する「歴史・記憶」以外の「次世代・子育て」「芸術・文化」の2チームの発表を聞いてみると、私たち「歴史・記憶」チームとはまた違った目線から池袋の町について考察していた。子育て世代の親たちの苦労や課題、芸術文化の盛んな池袋、というように池袋の様々な側面を見ることができたと感じる。また、同じ池袋の町の住民の方にインタビューしているにもかかわらず、世代や職業、生活環境によって全く違った考察になるという点に驚いた。その一方ですべての班に共通していることは、池袋の町の中で、違った立場、年代の方たちがそれぞれの場所で、コミュニティを作り、その中で人と関わり合いながら生活していることである。これまで多文化共生というと、日本人と外国人との間の話であるというような印象があった。しかし授業を通して、1つの町の中で、職業や年代、立場によってそれぞれ違った文化やコミュニティが作られており、それらの相互理解がまだまだ不十分な状況にあるということを知った。世代や職業関係なく、互いに認め合い、まじりあい、共生すること、これが多文化共生であると考え方が変化した。これからの池袋に必要なのは、相互理解の場を積極的に作っていくことであると考え。またこのような新しい交流の場を作ると同時に、伝統行事への参加など、伝統を地域全体で守っていくことも、今を生きる私たちの使命であり、地域協力につながるのではないだろうか。まちづくりの当事者としての自覚と責任をもち、積極的に町や人と関わり連帯すること。これが多文化共生、相互連帯をとっていくうえで重要であり、池袋の今後の発展に必要な不可欠な要素であるだろう。

3. (コロナ禍における) RSL 科目の履修を振り返り、今考えていること

コロナ禍におけるRSLでの学びを振り返ると、この学びは「今しかできない」とても貴重なものだったのではないかと考える。コロナ禍という人とのつながりが希薄になりつつあるときに、慣れないオンライン環境の中ではあったが、学生同士コミュニケーションをとりながら、試行錯誤しながらも1つのゴールを目指すという体験はとても学びの多い、面白いものだった。うまくいかなかったことも含め私の成長につながったのではないかと考える。自分たちで授業を作りあげるという楽しさは実践系科目ならではの楽しさであり醍醐味であると思う。また、日ごろ生活してはなかなか会えることのできないインタビューーのみなさんにインタビューという形で貴重なお話を伺うことができたことはとても大きな経験となったと思う。様々な立場、職業、年代の市民が混ざり合うことによって、町やその地域の文化は作られており、市民は町づくりの主役であるということ強く感じた。授業を通して、池袋の町、歴史、現在について知ることができたと同時に、コロナ禍で思うように進まない今を、あえて「ライブ」として楽しむこと、工夫することの重要さや面白さを学ぶことができたと思う。

私自身、新型コロナウイルスの感染拡大によって、予定していた留学の中止、アルバイト先がつぶれたことなど様々な逆境があった。しかし逆境ばかりだったかというところではない。コロナ禍での経験は新しい出会いや体験をもたらしてくれた。私はこの授業の履修をきっかけに、後藤先生の紹介

で、雑誌の編集部でアルバイトを始めた。もしもコロナ禍でサンドイッチ屋のアルバイト先がつぶれていなかったら、そしてRSLの授業を履修していなかったら、私は編集部でのアルバイトはしていなかっただろう。

今のアルバイトは、他の場所では体験できないような周りとのつながりを作ることができる場所である。また、はじめての経験がたくさんあり、日々発見と学びの連続である。私の担当している箇所はとても些細なものであるが、自分の携わった誌面が本屋さんで売られているのを見つけたときの喜びはこれまでに体験したことがないものである。今は博物館・美術館、地域のお祭りなどを取り上げて紹介するページを作っている。コロナ禍で様々なイベントが中止を迫られる中、オンラインでの開催、規模を縮小しての開催、あえてコロナ禍の現在を取り上げた企画展を開くなど、逆境の中で、様々な工夫をしている現状がある。インタビューで圓窓師匠がおっしゃっていたように、「もちろん対面でやる生の落語が良いに決まってる。でも、それができないんだもの！新しい方法を考えるしかないでしょ！」というように、今まで通りの「当たり前の生活」ができない今、できないことを嘆くよりも、逆に今しかできないことに目を向けて、工夫をして今を生きていくこと、今を充実させること。これが重要である。「コロナ禍だからできない」のではなく、「コロナ禍だからこそできる」という思考の転換は、今の私たちに最も必要とされている考え方なのではないだろうか。

また、留学についても「留学できないなら、今しかできないオンライン留学を体験しよう」という発想の転換で、長期休暇中にオンライン留学をした。海外の空気や雰囲気を感じることはいないけれど、クラスメイトが世界中にいて、今同じ時間を共有し、授業を一緒に受けて、一緒にアクティビティをしている。その不思議さと面白さ、生活も文化も異なる仲間たちと共に過ごした時間はとても貴重な経験となった。それと同時に、それぞれの国が同じようにコロナ禍にいて（ロックダウンなどむしろ日本よりもずっと大変な状況下にある）、苦しいのは私だけではなく、世界中みんな同じなんだと、改めて気が付くことができた。コロナ禍での留学体験は私に新たな学びをもたらした。そして海外に留学したいという気持ちがより一層大きくなった。

このようなコロナ禍での新たな学びや出会いは、「コロナ禍の今だから」私がつどり着くことができた未来である。1年前の私には想像もつかなかった私である。新型コロナウイルスの影響で、様々なものが全く予定通りに進んでいないけれど、それぞれの節目での私の決断と選択が今の私への道になっており、「今しかできない」という発想の転換がもたらした「今」であると思う。コロナ禍のなかでのRSLの授業は慣れていない分、難しいことも多く、正直大変なことも多かった。けれど苦労したからこそ、最終授業日の発表が終わったときの喜びがその分大きかったし、チームメイトという新たな出会いも経験することができた。これからは新型コロナウイルスの影響はしばらく続くだろう。3年の春。ようやく対面授業が始まり、約1年ぶりの友達との再会、そして待ちに待ったキャンパスライフ。楽しい大学生活が始まったと思った矢先、また緊急事態宣言。しかしこの新たにできた時間を有効に使うかどうかは自分次第。RSL 池袋の授業で学んだ「今しかできないライブを楽しむ」発想の転換を大切にこれから進んでいきたいと思う。

「RSL-コミュニティ（埼玉）」とその先にある学び —1人の人間としてコミュニケーションをとること—

社会学部メディア社会学科 2年

不二山 七海

(2020年度履修)

1. RSL科目を履修したきっかけ

私が「RSL-コミュニティ（埼玉）」（以下、「RSL 埼玉」）を履修した理由は、大きく分けると2つある。1つは、教育に対する関心である。私の場合、その関心の根底には学校教育への違和感が大きかったように思う。小学校では、「みんなで一緒に足並み揃えていきましょう」という雰囲気があったが、私はそれが嫌でしかたなかった。自分のペースでどんどん解き進めていきたい教科、逆にゆっくり解説してもらいながら理解していききたい教科など、それぞれの「できる」の程度はバラバラであるにもかかわらず、みんなと同じスピードで進んでいかなければならないのが苦しかった。この雰囲気は、もっと学びたいという思いを失わせたり、理解できない焦りを助長したりしかねないと感じていた。高校の頃に、オランダやスウェーデンの教育を調べる機会があり、どちらの国の教育も子どもが主体で、自分で自分のことを考えることを基軸とされていることに感銘を受けた。特にオランダでは、子どもが自分で自分のカリキュラムを作っていたり、異年齢のクラス編成がされており、自分の理解度に合わせて授業を受けることができていることを知った。学びの自分軸化。これが日本の学校教育で行われたら、もっと一人ひとりの学習意欲が高まるのではないかと感じた。その頃から「学齢にとられない学習の在り方」を考えたいと思うようになった。

2つ目の理由は、コミュニティへの関心である。高校時代の2年間神奈川県が生徒会連盟で活動した経験を通して、私は、他校の生徒とのつながり、地域の関わり合いの大切さを感じた。普段出会わない人と話したり考えたりすることで、狭まっていた視野が広がり、様々な気づきを得て、一つの可能性を手にすることができる。そこに参加する人の目の輝きや気づきから生まれるアイデアにわくわくする姿を見ていて、このような環境を生徒会役員だけのものにとどめるのではなく、誰もが広く参加できるコミュニティがあったらと漠然と考えていた。そう考える中で、学生向けの団体や子ども食堂、寺子屋など様々な形態の活動があることを知った。同時に、子どもの貧困についても考えさせられた。身近に教職に就いている者がおり、家庭環境や経済的理由により必要な教育を受けることが難しい生徒や、進路をやりたいことではなく、経済的理由によって決めなければならない生徒がいることを聞いていた。その話から、日本は世界に比べれば教育にアクセスしやすいのかもしれないが、だからこそ見落とされている貧困が存在してしまうのだと感じ、「相対的貧困」といったテーマにも関心を持つようになった。

実際に教育やコミュニティづくりの活動に携わりたい、自分の目で見て課題を感じ、独りよがりにならない行動をしていきたいと考えていた私にとって、「RSL 埼玉」の授業内容はとても惹かれるものであったのである。

2. 履修を通して学んだこと・感じたこと

「RSL 埼玉」の授業では、事前学習で生活保護制度や子どもの貧困について学んだのちに、学外活

動として、一般社団法人彩の国子ども・若者支援ネットワーク（通称：アスポート）が埼玉県内で運営する「学習教室」で生活困窮世帯の子どもたちの学習サポート活動を行う。アスポートの学習支援教室に通い、子どもたちと関わっていく中では、コミュニケーションについて考えさせられることが多かった。まず、子どもたちと話していて思ったのは、子どもたちには、同級生としてではなく、第三者である私に対してだからこそ話せることがあるということだ。

学校で起きたこと、そこで感じたこと、将来何をやりたいのか、どんな人になりたいのか。子どもたちの話を聞いていくと、特に前者の2点に関しては、普段同じ空間で過ごしている相手であったら話しにくいことなのではないかと感じた。中学生の男子と学校のことについて話していたとき、彼は「自分が本当に思ったことはあまり表に出さずに、その場の雰囲気や会話の流れにあわせて対応するようにしている」と語っていた。自分の考え方や思っていることを誰かに言うのはここにいる時くらいだとも話していた。そのことから私は、限定的な関わりだからこそ、見せられる「自分」というものがあるのだということに気づいた。人は無意識に、相手に応じて、見せる自分の使い分けをしているのだと思う。家族に見せる自分、友人に見せる自分、クラスメイトに見せる自分、その他に出逢う人たちに見せる自分。相手によって言うことと言わないでいることを自然と分けている。支援者という立場でコミュニケーションをとることで、私自身は子どもたちのために何ができるのか、何を求められているのか。それを考えさせられた。学校でも家でもない場所にいる人間が、一人ひとりにとっての居場所となり、抱えている「もやもや」を少しでも軽くすることができるのか。今回アスポートの活動に参加する中で答えが見つかったわけではないが、他者と向き合うということは、それぞれの求めていることを汲み取るということであり、そのためには試行錯誤しながら1人の人間としてコミュニケーションを取っていくことが必要なのだと感じた。

さらに、今回履修者の中で、事後学習で実施した個々の発表の際に外国にルーツを持つ子どもの支援について報告していた学生がいたが、私自身も外国にルーツを持つ生徒に数学を教える機会があった。その中では、日本語が得意ではない相手に対して、どうコミュニケーションをとっていくか、難しさを感じた。数学という共通してわかる数字を媒介しているからこそ、数式と簡単な日本語で説明すると、伝わる。しかし、間違えたものに対して、どこがどう間違えているのか、どう解けばいいのかを説明するには、簡単な日本語だけではうまくできないこともあり、どうしたら伝わるのか試行錯誤した。徐々に問題を解いていく中で、雰囲気や表情から理解度を読み取ることができるようになった。コミュニケーションは決して言葉だけで行っていることではないということを実感した瞬間だった。実際に学習教室で活動に参加したのは5回という短い間だったが、今まで以上に深く、コミュニケーションについて考えさせられた時間だった。

この授業のテーマである相対的貧困について、子どもたちと関われば関わるほど、相対的貧困とは可視化されない問題なのだと感じた。だが、一緒に勉強や他愛もない話をする中で、子どもたち自身が自分の置かれている環境を理解し、自分なりにどうすればいいか考えていることも感じられた。今の環境を受け入れその中で頑張ろうとしている子どもたちは、きっと自ら支援を求めることはないのかもしれないと思った。その一方で誰かに相談したい、誰かを頼りたい気持ちもまたあるのだと思う。目に見えないからこそ、気づくのが難しいからこそ、私には何ができるのかを鋭く問われているように感じた。

もう一つ気づいたことは、子どもたちは日常生活の中で接するものや、アニメ・漫画などから学んでいることだ。当時小学生の間では「鬼滅の刃」が流行っており、子どもたちはそこに出てくるキャラクターの名前を漢字で書いていた。小学校では習わない難しい漢字もすらすらと書いている姿を目

の当たり前にして、興味を持ったことに対する子どもたちの吸収力の高さに驚いた。その様子を見る中で、以前聞いた ARCS モデルという学習モデルについて思い出した。ARCS モデルとは、教育心理学者のジョン・ケラーが提唱した、学習意欲向上モデルのことであり、学習者の興味関心を引き、探究心を喚起するための一つの方法だ。私はこのモデルは学習内容が理解できない生徒の意欲の低下を防ぎ、継続的な学習のサイクルを作っていく上で基礎となるものであると考え、事後学習では ARCS モデルを活用した学習支援方法や学習支援ツールなどについてアスポートスタッフの方々へ提案を行った。子どもが興味関心を持ち、それを学びとつなげ、子どもたちの「できる」を増やし、自信を増やしていく。この ARCS モデルは子どもの興味と学びが結びつければ有効であるが、そもそも一人ひとりの興味関心をどう引き出していくか。そしてそれを実際にどのように学びと結びつけていくかについては今後の課題となってくる部分なのではないかとのコメントを、アスポートスタッフの方々からはいただいた。私の考えとしては、現段階では、まず子どもたちの「好き」を増やしていくことと、子どもたち自身が自分の「好き」に気づくことが大切だと考えている。小さい頃から様々なことに好奇心のアンテナを張り、知る中で自分の「好き」を集め、好きなことが何かをしっかりと知っていくことをサポートすることができれば、大人になっていく中で、何をやりたいのかが見えやすくなるのではないかなと思う。それを学びに活かす方法を模索していきたい。



【写真（授業の様子）】

左：アスポート学習支援教室での現地活動を行う履修学生の様子

右：事後学習（オンライン授業）の様子

*2021年1月の緊急事態宣言により、本科目の事後学習はすべてオンラインでの実施となった。

3. RSL 科目の履修を振り返り、今考えていること

「RSL 埼玉」の履修を通して相対的貧困の現状について自分の目で見て感じ考えていく中で、もっと広く地域社会にある課題について現場で話を聞き、知り、学びたいという思いが強まり、この科目の履修を終えた春期休暇期間中に議員インターンシップに参加した。衆議院議員、県議会議員、市会議員のもとで仕事をする中で、秘書の方や有権者の方と話すときと、アスポートで出会う子どもたちと話すときとの自分自身の意識の違いを感じた。また、有権者の方と話す中で、秘書の方と話すときと学生ボランティアと話すときとでは有権者の方の雰囲気も違うことを知った。これは、アスポートの子どもたちが、支援員の方と話すときとボランティアの私たちと話すときとの雰囲気の違いに近いのではないかなと思った。相手によって見せる「自分」が違う中で、私という人間が相手にとって何者

であるかを考えながらコミュニケーションを取ることも大切だと感じた。

また、有権者と話す中では、地域にあるあまり表立って問題視されない、潜在的課題が多くあることを知った。相対的貧困だけでなく、さまざまな可視化されにくい課題が地域社会の中にはあるのだと知り、行政の行き届かない部分があることを痛感した。有権者の方から「どうせ変わらない」という声も聞き、私は、現場の声を拾い課題や実態を伝えること、より多くの人に自分事として知ってもらうことの重要性を改めて強く感じた。そこで2年次の春学期から、「伝える」力を養うために、記事原稿を書く講義を履修し、相手に伝える時に大切なことは何か、相手に伝わるためにどう言葉を選ぶべきなのかを学んでいる。言葉の持つ力を最大限活用し、より多くの人に伝え、自分事として考えてもらえるような発信者になりたいと考えている。

さらに私は、アスポートで、子どもたちにとっては同級生や同じ学校の人間でないからこそ話せることがあるのではないかと感じた体験を通して、子どもたち各々が思い思いに過ごせる場—サードプレイスの創出を行いたいと考えるようになった。現段階の構想では、勉強をしたり趣味を発信したり、談話したりと、一人ひとりそれぞれの過ごし方ができる場所にしていきたいと考えている。学校でも家でもなく、普段関わることのない人が集まる場所だからこそ、日常にとらわれることなく過ごせるのではないかと思う。子どもたちが、少なからず学校で抱えてしまうストレスを少しでも軽減して、明日を明るい気持ちで迎えることができるような場を作っていきたい。その中では、この場所に来る人たちにとって、支援者となる私は何者であるかを考えつつ、どうしたら子どもたちが落ち着くことができ、気を張り詰めすぎることなく安心して居ることができるのかを試行錯誤していきたいと思う。

「つながり」のせかい —「RSL-ローカル（南魚沼）」での気づき—

社会学部社会学科2年
重松 猛
(2020年度履修)

1. 履修のきっかけ

RSLに出会ったきっかけは新型コロナウイルスだ。実際、新型コロナウイルスが流行していなかったらRSLの授業は受講していないと思う。2020年度は新型コロナウイルスの流行により、外出自粛を余儀なくされ、大学の授業は全面的にオンラインになった。その結果、人と関わる事がなくなり、一人で過ごす時間が増えた。このご時世は特に、外部の情報を得るためには自らが積極的に行動する必要がある。しかし、入学後の新入生向けオリエンテーションもなくなったこともあり、2020年度4月以降、大学での過ごし方がわからないでいた。当時、僕は小学生時の夏休み気分、YouTubeや動画配信サービスの動画を一日中見ていて、受動的であまり意義のない生活を送っていた。一般的な言葉を使うと“怠けていた”のだ。

何もしていない日が続くうちに、意識が自分に向いていくようになる。そうするとコロナ禍における大学生活の過ごし方、ひいては就職活動や将来の生き方を考えるようになった。そして、これらのことはひとりだけでは決められないと感じた。

私はもっとたくさんの経験や人と関わる必要があると思った。そして、独特な体験ができ、様々な背景を持つ人と関われる授業を知った。それが立教サービスラーニング(Rikkyo Service Learning;通称RSL)の科目である。RSLの授業は「答えのない問いについて考えること」を大切にしており、高校で勉強した「答えのある問い」とは正反対で、私はとても興味を惹かれた。

数あるRSL科目のなかでも、私は「RSL-ローカル（南魚沼）」(以下、RSL南魚沼)という科目を選んだ。理由は上記で述べた通り、より独特な体験ができ、様々な背景を持つ人と関われる授業だと感じたからだ。過疎高齢化、農村、豪雪という特徴を持つ南魚沼に足を運んで学ぶということが私にとって貴重であった。私が在住している神奈川県都市部近郊は著しい過疎、農村、ましてや豪雪などを感じることはできない。また、環境が違う地域に住む人の考え方や生き方がとても気になった。それだけではなく、この授業は学年や学部は不問で、状況をみながら授業も対面で行う予定であることが提示されていたので、様々な人と関わりたい私にとってはとても魅力的だった。

2. つながるせかい

この授業で学んだことは一言でいうと“つながり”である。世界はつながりでできている、それを改めて確認させてもらえる授業だった。事前学習として読んだ『場の教育—「土地に根ざす学び」の水脈(シリーズ地域の再生12)』(岩崎正弥著,高野孝子著,農山漁村文化協会,2010年)という本を通して、現場に行く前に現代の問題点である“身体性の欠如”を学んだ。

実際に、五感を使う機会が減っている時代において感じていた生きづらさの一つの理由に気づいた。身体との“つながり”の欠如が生きる実感の欠乏とつながっているのである。この事前学習を踏まえ、私は昔の人間の生活のあり方に関心を持った。そして民俗学の父と呼ばれる柳田国男の著書『日本の

民俗学』(柳田國男著,中央公論新社,2019年)を課題本として選んだ。本書では、一番信頼できるのは実際に自身が目で見たものであると述べられていた。百聞は一見に如かずということだ。読書後、本授業の特徴である、現地に赴くフィールドワークに期待が膨らんだ。しかし、新型コロナウイルスの影響により悔しくも現地への訪問ができなくなり、その代わりに南魚沼の栃窪集落に住む方々と中継(LIVE配信)をつないでお話を聞いた(その他にも、現地の小学校「栃窪小学校」との交流他、現地に行けない代替として、LIVE配信等を中心としたプログラムが実施された)。

地元の農業存続に危機感を抱きながらも田畑を耕す農業家、過疎化により生徒が少ないからこそ、少人数制教育を活かす小学校、近所の人々との付き合いを苦とせず相互扶助を当たり前とする住民。画面を通してではあったが地元の方との交流を通じ、自分と価値観の異なる人々に出会った。私は、自分自身の豊かさの曖昧さ、社会の多様さを学んだのではないかと今、振り返ってみて感じている。そして、彼らは自然、人と無意識に“つながっていた”。意識的につながりを求める僕とは正反対の生き方だった。そして、LIVE配信での交流の後、自分が住んでいる「地元」について調査するフィールドワークでは、地元の些細なつながりや失われたつながりに気づいた。例えば、地元産の食材直営店の存在や道路沿いの桜の剪定などだ。普段意識しない地元の一面を知り郷土愛とまでいかないが、地元に対する好奇心が生まれた。自治体の火の用心、道路沿いの雑草を抜いてくれるボランティア、小学生の安全を守る学童擁護員など、細かいつながりによって地元がつくられているといった、“つながり”の存在に気づいた。私は、本科目の履修を通して今までになかった視点で地元における“つながり”を捉えることができたのではないかと考えている。



【写真(授業の様子)】

左上: Zoomを用いたオンライン授業の様子

右上: 現地活動が実施できなかったため、栃窪小学校との交流もオンライン(LIVE配信)に

中下: 地元の方との交流(LIVE配信)の様子

*この科目は宿泊プログラムから日帰りプログラムへと変更となり、2021年1月の緊急事態宣言により現地活動もオンライン(LIVE配信含)授業へと切り替わるようになった。

3. オンラインの弊害

もちろん、対面授業としてこの科目を履修できなかったことで残念と感じたこともある。それは、学生同士のつながりを持てなかったことだ。これはオンライン授業の弊害といえる。当初、南魚沼の現地に行って学ぶ予定だったが、最終的にはオンライン開催になった。オンライン授業では授業の時間しか他の学生と話さない。教室移動時や授業開始前後の自由な「間」がないのである。学生はこの自由な「間」で親交を深めることが多い。多くの学生は授業がある教室に移動しながら友達と話した経験があると思う。

当初、南魚沼では色々な場所を巡り、現地の方々と食事をしたりするほか、いくつかのワーク（活動）を実施する予定だった。本来は自分の知らない土地でこの「間」を友達（他の履修者）と共有できるはずだった。しかし、新型コロナウイルス感染防止のために授業はオンライン開催となってしまった。このような自由な「間」が失われてしまったのはとても残念である。そういったこともあり、RSL 南魚沼を受講後、受講者同士で交流することはなく持続的な関係性を作れなかったことが残念に感じている。

4. 学んだこと

本授業を通して、当たり前の“つながり”に目を向けることができた。“当たり前”は気づくことが難しい。“当たり前”に目を向けるRSL科目と“当たり前”を激変させた新型コロナウイルスの影響がよりこのことを学ばせてくれた。ただ、人間は忘れる生きものだ。正直に言うと、授業から3ヶ月以上たった今、一度学んだつながりや大切さを忘れるときもある。しかし、つながりは残っている。本レポートの作成を依頼してくれたRSLセンターのスタッフの方とは度々お話しさせてもらっている。またこの授業を担当された高野先生とのメールのやりとりも続いている。高野先生は南魚沼市に住居を持っており、今度伺わせていただく予定である。本科目でつながった人の存在が本科目で学んだ“つながりの重要性”を思い出させてくれ、自分の選択肢を広げてくれている。対面での活動が難しいご時世だが、これからも人と関わる姿勢を大切にしていきたい。人とつながる機会は立教大学の外にもたくさんある。大学内だけに留まらず、様々な経験を積む予定だ。

立教サービスラーニング(RSL)とその先にある学び —現場での気づきと今の私—

コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科4年

杉山 賢汰

(2019年度履修)

1. はじめに

サービスラーニングの効果は、キャンパスと現場の学びの往還によって“社会のなかに自分がいる”感覚を養える点にあると思う。RSL では全学共通科目でありながら、社会とのつながりを体感することができる。大学の教養科目は知識を得る場だと思っていた自分にとって、現場での体験があることは新鮮だった。そして履修後も、学んだ分野や関心のある現場で、ボランティアなどで学びを深め社会とつながり続けていくことが可能である。RSL は、その際の入り口としても最適であると感じている。私の例でいえば、デイサービス施設でのアルバイトや学習支援ボランティアに、RSL での学びがつながっていると感じる。本報告書では、RSL での学びとその後の活動とのつながりについて、私が感じたことを記したいと思う。

2. RSL 科目を履修するきっかけ

高校時代リハビリテーション系の学部を志望していたこともあり、私は大学入学前から高齢者の地域生活の支援に関心をもっていた。立教大学に入学した春は、大学生になり興味のあるフィールドで学べることへの期待に胸を膨らませていた。それまで高校生だった私にとって、高齢者の方と接する機会はなかった。現場に行くきっかけがほしかったが、知識のない自分がいきなりアルバイトやボランティアとして高齢者施設の門を叩くには、かなりの勇気が必要だった。

そのような心もちで迎えた入学直後のオリエンテーション期間に、新座キャンパス内の立看板に掲示してあった「RSL-プロジェクト・プランニング」の案内を見つけた。活動先の1つに高齢者が住み慣れた地域で暮らしていくための支援を行っている「NPO 法人サポートハウス年輪」(以下、「年輪」)があると知り、自分の学びたいことが詰まっている活動先と同科目に興味をもった。早速、案内に記載されていた時間に履修説明会が行われる教室に行ってみた。しかし1年次は履修対象外と知り、その年はRSLの導入科目である「大学生の学び・社会で学ぶこと」を履修することにした。来年度は絶対に履修しようと決めていた。

2年生になり、満を持して「RSL-プロジェクト・プランニング」を履修した。他の授業でNPOについて学び、NPOの地域に根差した社会的な活動に関心をもったこともあり、将来事業を起こすことも考えるようになっていた。そして、できれば「年輪」で、高齢者の生活支援や地域のNPO法人の意義などについて、多くを学びたいと考えていた。コミュニティ福祉学部の授業では現場に近い方の話を聞く機会も多いが、RSLでは福祉とはまた違った「社会課題とそれに取り組んでいる現場を知る」という視点で、他学部の履修生とも議論ができる点にも魅力を感じた。そして、活動先の希望が叶って「年輪」で学べることになった。

3. 履修した際に考えたこと・経験したこと

池袋キャンパスで行われた事前学習では、「年輪」に取り組んでいる社会課題である高齢者の一人暮

らしと認知症についてまとめた。この2つはいずれも、現在の日本の超高齢社会で大きな問題になっていることだった。また、自分で意識して学びたい事柄として次の3つのテーマを設定した。

<本科目で設定した学びの3テーマ>

・認知症の方をより理解する

大学の講義で認知症が扱われることはあったが、当事者の方と接したことはなかった。5日間の現地活動を通して、認知症という症状や認知症とともに生きている方についての理解を深め、多角的に向き合いたいという思いがあった。

・ケアの姿勢について、実践から学ぶ

コミュニティ福祉学部では“いのちの尊厳のために”という精神のもと、多くの授業でケアの姿勢について学ぶ。しかし、寄り添うことが大切と言葉で何度教わっても、実際に体験しなければその効果はわからなかった。目線を合わせることや感情を受け入れて共感すること、傾聴することなど、ケアの現場で大切と言われていることについて現場で実践して確かめようと考えた。

・NPO法人としての役割とその意義を学ぶ

既に述べたように、他の授業でNPOについて学んだことがきっかけとなり、NPO法人の運営や活動実態に関心をもつようになって、将来の選択肢の一つとしても考えるようになっていた。そのため、NPO法人として活動をする意義や地域のNPOの役割について、実際に運営しているスタッフの方々とともに活動しながら知りたいと考えたのである。

以上のテーマに加えて、「高齢者の暮らしを支えるには“その人らしさ”を尊重することが大切である」という自分なりの仮説を立てた。コミュニティ福祉学部で障がいのある方や高齢者の生活について学ぶなかで、幸せに暮らすためのキーワードの1つに“その人らしく”があった。1人暮らしの高齢者や認知症の方の生活でも“その人らしさ”を損なわないようにすることが重要ではないかと考え、仮説を検討すべく現場での学習に臨んだ。

先に述べたように、私がお世話になったのは、東京都西東京市で高齢者や認知症の方が地域で暮らしていくための支援をしている「NPO法人サポートハウス年輪」だ。「年輪」は“いつまでも地域で暮らし続けるために”を合言葉に、1994年に地域の主婦12人によるボランティアグループとしてスタートした団体である。現在は事業の幅を広げ、介護保険サービスとして認知症対応型通所介護や認知症対応型居宅介護支援（グループホーム）を行い、団体本部にケアプランセンターや訪問介護ステーションを置いているほか、介護保険の適用外で配食や介護相談などのサービスも提供している。実際に訪れて特徴的だと感じたのは、「昭和の学び舎」という要介護認定によらず65歳以上であれば誰でも参加できる文化活動をボランティア主体で行っている点と、本部のカフェスペースが「認知症カフェ」や「子ども食堂」としても利用されているという点だった。私は現地活動の5日間で、通所介護事業「年輪デイホーム」での利用者の方とのふれあいをはじめ、グループホーム「ねんりんはうす」「ばぶちゃんち」見学や、配食「ねんりん弁当」の配達同行、訪問介護への同行などさせていただいた。現場で活動をすると想像していたよりも多くのことがわかり、考えが深まった。以下に、その内容をまとめて記していきたいと思う。

<認知症の方と接して考えたこと>

認知症対応型通所介護「年輪デイホーム」は、ご自宅で暮らす認知症の方が日中を過ごす場所で、食事や入浴、レクリエーションや体操といったサービスが提供される。程度は様々だが利用者の方は認知症をおもちであるため、実際に何度も同じ話をされることがあった。はじめは戸惑ったが、その度に心から耳を傾けるようにすることで信頼関係が築かれていくことを感じた。少しずつ、感情を見せてくださるようになり話の幅も広がっていったのだ。どの方も、楽しかったことや悲しかった出来事などを繰り返し教えてくださった。たとえ自慢話であっても、その方にとっての大切な過去なのだと感じたため敬意を忘れないようにした。昔を懐かしまれる様子や生き活きとした表情から、素晴らしい人生を歩まれてこられたのだと思った。

利用者の方が何か不安に感じられているようであれば、それが認知症の症状による現実にはないことへの不安でも、一緒に考えて安心していただくことが関係を築くうえでも大切とわかった。認知症の方にとって、そのような不安は時に徘徊につながってしまうこともある。しかし、「年輪」ではデイホームと後述のグループホームともに鍵を閉めず自由に出入りができる環境にしており、行動を制限することはしていない。対話を重視し、不安そのものを鎮めるための工夫をしていた。

私は、認知症になることは悲しいことではないと思えるようになった。本人が自覚したときや診断を受けたときから、ものすごい悲しみや苦悩を乗り越えてこられたのだろうという想像や、老化が健康な高齢者に比べて3倍の速度で進んでしまうという知識などから、認知症になるということを悲観的にとらえていた。しかし、実際に穏やかに過ごされているのを前に、認知症になっても素敵な笑顔が見られると知ったことで、いい意味でそのイメージが崩れた。

<ケアについて感じたこと>

ご家庭での介護が難しい認知症の方が共同生活を送るグループホーム「ばぶちゃんち」を訪れた際、入居者の方の症状が想像以上に重く、思わず顔をしかめてしまった。すると、目の前の入居者の女性に“変な顔しないで”と言われてしまった。その時、会話がかみ合わない程症状が重い認知症の方でも、表情は伝わるから笑顔でいようと思った。逆に、重度の認知症の方にも表情はあるので、こちらは表情を見て気持ちを受け止めることが大切だと感じた。このことは、私たちは言葉以上に相手の表情から読み取っている部分があるということではないかと思う。

利用者の方から戦争体験や昔の日本のお話を聞くなかで、高齢者は人生の先輩であると改めて感じた。その方の得意なことや子育ての経験などをいきいきと話していただき、スタッフも参考にしている様子で聞き入っていた。認知症の影響や高齢による身体機能の低下によって、利用者の方が目の前でできることは少ないかもしれない。しかし、それでも敬意をもって接し、その方の人生、人格を尊重することを忘れてはいけないと強く感じた。

訪問介護への同行では、1人暮らしをされているパーキンソン病の男性のご自宅へ伺った。その方は1日中震えが止まらず、思うように体を動かすことができないなか生活されていて、訪問介護のサービスでは昼食の準備をした。男性から、東京ディズニーランドが開業する際アトラクションの人形を製作されたというお話を聞いた。堂々とした口調から、お仕事にとっても誇りをもっておられる様子が伝わってきた。体が不自由な人でも尊厳をもって生きられるために、何が必要かを考えた。そして、身体や認知機能がどのような状態であっても、その方のアイデンティティといえるような過去を大切にすることであれば、自分にもできると思った。さらに、現在の暮らしでも、その人ができることで貢献をしてもらうことも必要ではないかと思った。この男性の場合は、ベッドの上で自分にできるこ

とは無理に手伝わず、やっていただくような方法で介護をしていた。また、「年輪デイホーム」では、スタッフが清掃で使うぞうきんを利用者の方が縫っていたり、洗濯物を畳むのを手伝われていたりもした。

ケアする人も心があることに、改めて気づかされた。四字熟語クイズのレクリエーションを任せられたとき、人前で話すことが苦手であったから緊張したし、うまくできるか不安もあった。また、ある利用者の方が感情的になってしまいケアスタッフの1人に「汚らわしい」と言ってしまったとき、そのスタッフの方は少なからず落ち込んでいた。ケアを受ける側、ケアする側、どちらも人間であるから、ケアワーカーの心の負担にも気を配る必要があると感じた。



【写真1、2】

対象物を目で追う動き、打ち返す動作が身体機能や認知機能によいとされ、デイホームで昼食後毎日行われている風船パレーのレクリエーション。どの利用者の方にも風船がまわるよう、お一人ずつの表情を見ながら続けていった。

<地域のNPO 法人としての「年輪」>

配食事業「ねんりん弁当」には、家事の負担を軽減するサポート、配達による地域での見守りという2つの役割があるのではないかと、事前学習で仮説を立てていた。献立を考えている管理栄養士の方の話を聞いたり、配達に同行させていただいたりしたことで、その仮説を確かめることができた。それだけでなく、健康維持に欠かせないバランスのよい食事（減塩食で高血圧症や心疾患のある人に効果的であり、たんぱく質を摂ることでフレイル予防にもなる）を提供するという機能を果たしていることもわかった。さらに、毎日決まった時間に来る配達スタッフに頼み事や相談をしている方もいたことから、安否確認だけにとどまらない、少しの言葉のやりとりが楽しみになっているという方も多くいることがうかがえた。安心感や楽しみをもち続けられることが、地域で暮らし続けるために重要なのではないかと考えた。

NPO について、収入が不安定であることや長続きする例が少ないなど、新聞やニュースなどの報道を通して伝わってくることは明るいイメージがあまりなかった。しかし、活動の最終日「サポートハウス年輪」の安岡理事長にお話を伺う中で、同団体は地に足のついた運営をされていると感じることができた。NPO 法人は公共団体からの補助金・助成金、企業や個人からの寄付によって活動している。金銭的に協力をしている地域の支援者は、法人の運営や活動方針に積極的にかかわり意見を発することができる。本部にあるカフェスペースは誰もが気軽に立ち寄れるよう開放していることから、「年輪」は活動を支援してくれる地域の方々をととても大切にしていることがわかった。そのことは同団体が「地域住民主体のNPO」であることを象徴していた。さらに、「年輪」の活動がいつまでも地

域で暮らし続けるための「社会変革運動」であるべく、地域の人の声を政策提言などで社会に届ける活動にも力を入れているとのことだった。

私は大学1年生のときからフィットネスクラブでアルバイトをしていることもあり、それまでは認知症の予防や介護予防にばかり興味を向けていた。「RSL-プロジェクト・プランニング」で認知症の方を対象にした支援の現場を経験したことで、認知症になっても、介護が必要になってもその人らしい生き方を支えていくことはできるのだということがわかり視野が広がった。

心身がどんな状態であっても、自宅や住み慣れた地域で暮らしたいという気持ちは変わらないだろう。認知症や高齢による身体機能の低下があったとしても、できるだけ地域で生きていく・暮らしていくという希望をかなえられるような支援をすることも大切だと「年輪」での活動を通して気づいたのだ。「年輪」では、環境を整えご本人の意思を尊重することで、認知症になった人でもその方らしい生活を送ることができていた。もちろん、利用者の方々が屈託のない笑顔を見せてくれるまでに、彼らは大変な悲しみやつらさを乗り越えてこられてきたのだと思う。しかし、それを乗り越えて生きる方々の人生は尊重されるべきものだと感じたし、何より認知症になることは必ずしも悪いことではないのだと思えるようになった。また、支援の仕方次第で認知症になってからもその人らしい生活を支えていくことができるということは、予防にばかり目が向いていたそれまでの私に大きな気づきを与えてくれた。

共感したり、傾聴したりして寄り添う姿を見せること、その方にできるようなことで貢献する喜びをいつまでも感じてもらうこと。毎日同じように営まれていく生活のなかにも穏やかに、その人らしく暮らしていくための支援のヒントをたくさんみることができた。

私のまわりの、現在介護者となっている息子や娘にあたる世代の人たちから“認知症になったらおしまいだ”“あの人認知症になっちゃってさ”などという声を耳にしたことがある。それだけ認知症になってしまうことに対してネガティブなイメージをもっている人は多いと思う。私自身も、「年輪」に行くまでは認知症になってしまうことはつらく大変なことだと思っていた。しかし、「年輪」での活動を通してそれまでとは違う考えが芽生え、認知症の人とそうでない人との線引きをなくすことができたと思う。「年輪」での5日間ですばらしい方々と出会い、自分の思い描いていた理想に近い現場で過ごすことができたこの経験は、今後の自分の生き方、働き方を考えていく上で大きな指針になるだろうと感じた。

4. 履修後に活動した内容とその活動を継続した理由

「RSL-プロジェクト・プランニング」には、様々なフィールドで学んだ履修生がいた。事後学習で彼らの報告を聞きながら自分のなかの考えと結びつけていくのも、大変有意義な時間であった。自分の経験したことのある現場と比較をすることで、共通する課題、異なる点などを知ることができるのである。

例えば、多文化共生に関する事業所で外国にルーツのある子どもを中心とした学習支援に携わった学生や、相対的貧困といわれる生活困窮者世帯の子どもを対象とした学習支援を行っているNPOで活動した学生の発表は、私がボランティアとしてかかわっている池袋地域の子ども支援のNPO活動にも参考になる部分があった。それぞれ活動先のある地域のニーズが支援の内容にも反映されており、草の根レベルの地道な活動の意義を再確認したのだ。東日本大震災の被災地で活動してきた学生の報告からは、自分もその夏にゼミ合宿で訪れた被災地のコミュニティとの共通点を探った。また、ゼミの友人は日本財団学生ボランティアセンターのプログラムでインドネシアに行っており、日本と全く違

う生活環境に苦勞した話などを聞き海外への興味も広がった。

他のフィールドへの関心と同時に、「年輪」での経験から自分は高齢者と接することが好きであることがわかったため、支援の現場のなかでも高齢者にかかわるものをもっと経験してみたいと思うようにもなっていた。「年輪」では、働いているスタッフの方々も優しく温かみのある方たちだった。私自身の現地活動の評価で“話し方が丁寧”と言っていたことは、自分の利用者の方への関わり方が間違っていなかったのだと自信につながった。自分でも、傾聴をすることで関係が深まる感触や高齢者とかかわることに楽しさを感じるようになっていた。

「年輪」でお世話になったスタッフの方からは、毎年春先に行っているイベントのお手伝いの話をいただいていた。しかし、参加するつもりでいた2020年3月は新型コロナウイルスが猛威を振るい、イベントが中止になってしまった。また、国境を超え“地域で寄り添う”ことについて学ぼうと履修していた「RSL-グローバル(フィリピン)」の現地活動(2020年2月)へも参加する予定だったが、こちらも渡航直前に新型コロナが世界的に流行したため、残念ながら中止となった。

しかし、春休みを地元で過ごさざるを得なくなったことが、結果的にデイサービスでのアルバイトを始めるきっかけになった。フィリピン渡航中止が決まった2020年2月、地元の機能訓練型デイサービス施設でアルバイトを始めることにした。高齢者が在宅生活を続けるための健康づくり支援を行っているというその施設が以前から気になっていた。

施設に連絡をして、アルバイトとして勉強させてもらえることになった。私の仕事は、トレーニングマシンや歩行訓練などで利用者さんの健康づくりのお手伝いをする事だった。それまでも、フィットネスクラブでのアルバイトで高齢者の方の運動をお手伝いする機会は多かったが、「要支援」や「要介護」など、介護保険を利用するレベルの方に対して行うのには不安があった。何より、通所介護施設で学生の自分にできることはあるのだろうかと思っていた。しかし、「年輪」で高齢者とかかわる楽しさやコミュニケーションの仕方を学ぶことができたので、現場でさらに理解を深めるために挑戦しようと思うことができた。

はじめは覚えることが多く大変だった仕事にも慣れ、祖父母ともいえるような年齢の利用者の方々にかわいがられながら、現場で地域社会とつながれることに喜びを感じ続けている。今でも、利用者さんの前では傾聴すること、目の前のコミュニケーションを大切にすることを心がけている。また、高齢者の方の生活を支えるうえで“言葉にならない部分”を汲み取ることが大切だと気づき始めた。利用者の方の中には認知症をおもちの方もいらっしゃるが、接し方の基本を「年輪」で身につけることができたおかげで、じっくりと向き合い、その人らしさを引き出すことができているのではないかなと思う。人生の最終章を一緒につくっていく介護のお仕事に、尊さを感じるようにもなった。

5. これから学んでみたいこと、やってみたいこと

デイサービスでのアルバイトでは、個別性を要するケアの仕事の難しさを感じる時もある。利用者の方のお一人おひとり、痛みをもっている部位や持病は異なるし、好き嫌いもそれぞれだ。目の前の人をしっかりと見つめなければ、寄り添うことはできないのだと改めて実感している。社会では、講義で学んだことがすべてに当てはまるわけではない。そのことを心に刻み、これからの大学での学びに臨んでいきたい。卒業研究でも、高齢者が地域で暮らしていくための支援の方法について取り組みたいと考えている。そして、大学やRSLで学んだことを糧に、傾聴することを忘れず、人の痛みのわかる人間になりたい。